



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY



CTL Kansai University Center for Teaching and Learning Newsletter



関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

June 2010

vol. 03



「関西大学のFD活動の原点」として

教育開発支援センター長 化学生命工学部教授 池田 勝彦

関西大学のFD活動は2000年4月に、全学共通教育推進機構の下に、FD部門委員会が設置されてから始まり、2010年4月で11年目に入りました。その10年間に、全学共通教育推進機構は、全学の教学の要となる教育推進部と改組され、FD部門委員会は学部・大学院の教育改善を担う機関として、教育推進部の下に教育開発支援センターとして生まれ変わりました。

本学には建学の精神は『学の実化』が謳われています。この建学の精神に則った関西大学独自の教育改善の理念として、2010年4月に「関西大学のFD活動の原点」が設定されました。

「原点」は次のように謳われています。「関西大学は、「学の実化」に基づく教育を支援するためにFD活動を行っています。教育の質の維持・向上の土台となる教員・職員・

学生のチームワークを培うこと、これが本学FD活動の原点です。」

つまり、教員・職員・学生のネットワークを構築し、教育の向上をめざす局面ごとに役割や主体を交代させながら、三者の有機的な協働を行うことが、本学FD活動の原点なのです。

このチームワークが本学FD活動の最終目的でなく、あくまでも「原点」であり、その原点から関西大学がめざす教育に沿った教育改善の方向を見極める北極星といえます。

「原点」に謳っておりますように、教育開発支援センターのみではこの原点構築は困難です。先生方、学生のみなさん、職員の方々の協働があってこそその原点でございます。

今後ともご協力いただきますようお願いいたします。

ワークショップ・研修会報告

「スタディスキルゼミ」、「知のナビゲーター」ワークショップを開催しました



教員とLA学生の共同作業の様子

昨年度まで「スタディスキルを身につける」という科目名で開講されていた全学共通科目が、今年度からは「スタディスキルゼミ（各テーマ）」と名称を変え、バラエティ豊かにパワーアップしました。用意されたテーマは「ノートをまとめる」、「パソコンで学ぶ」、「プレゼンテーション」、「レポートを作成する」、「課題探求」、「ディベート」の六つです。4月からの授業スタートに向け、教育推進部・教育開発支援センターでは、スタディスキルゼミ（および文学部開講科目「知のナビゲーター」）の担当教員と、スタディスキルゼミの受講生のアシスタントとして働いてくれるLA（Learning Assistant）の学生を対象とするワークショップを3月

24日に実施いたしました。

ワークショップは、「プレゼンテーション」、「ディスカッション」、「ディベート」の三つのセッションを含み、それぞれ実際の授業と近い内容のワークを、教員とLA学生が共同作業を通じて実践してみることをねらいとするものでした。参加者は30名を超え、それぞれのセッションは授業さながらの熱気あふれるものとなりました。

「プレゼンテーション」のセッションでは、教員・学生ともに4月からの授業において行う頻度の高くなる「自己紹介」をテーマに、魅力的な自己紹介の作り方と、そのプレゼンテーションの技法をグループごとに競いました。「ディスカッション」のセッションでは、「関西大学の初年次学生に受けてもらいたい授業とは？」というテーマで、ブレインストーミングとKJ法を実践しました。最後の「ディベート」のセッションは、プレゼンテーション・情報収集・時間管理など、複数のスタディスキルを使いこなす必要がある、高度なアクティビティです。今回のワークショップでは「大人数講義で出席を

取るべきか否か」を論題に、肯定側・否定側に分かれて熱い論戦を交わしました。

プログラムは、トータルで5時間を超える長丁場となりましたが、参加者の皆さんの高い参画意識に支えられ、時間の長さを感じさせない集中したものとなりました。それぞれのセッションに対する参加者の満足度はいずれも高く、4月からの授業開始に向けてよい滑り出しになつたという感想も聞かれました。また、LAの学生とともに実践を行うことで、学生スタッフと教員の間の連携をはぐくむ一契機となりえたことも本ワークショップの大きな意義だったと言えるでしょう。（教育推進部助教 須長一幸）



グループワークの内容発表

FD Caféを開催しました

去る4月3日(土)、千里山キャンパス第2学舎C301を会場に新任教員研修会(FD Café)が開催されました。今回の対象者は4月1日ご着任の新任教員と関西大学での教員歴3年未満の教員です。新年度開始早々の忙しい時期であるにもかかわらず、36名のご参加を得ました。

研修はアイスブレークを兼ねたグループингからはじまり、一つのテーマについてのダイアログ(対話)を重ねる“World

Café”を経て、参加者がグループごとにまとめたキーフレーズをMap(mind map)として描く、というスタイルで進行してきました。「大学4年間で学生に学んでほしいこと」というテーマには複数のアングルからの意見が出されましたが、それがゆるやかではあるものの、相互に、あるいはそれぞれの延長線上に有機的な結びつきをもつことが確認されました。

とはいって、今回の研修は「4年間の学生生活で学んでほしいこと」が何であるのか、その結論を得ることを目的としたものではありません。出された一つ一つのフレーズの適否あるいは可否について論じることも目的ではありません。教員が共通するテーマについて意見や情報を交換し、知見やアイデアを共有すること、そのよう

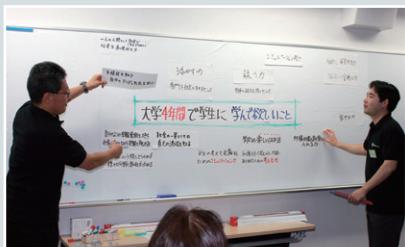


本物のCaféのような楽しい雰囲気の中で行われる意見交換 (“World Café”)

な営みを促すための仕掛けを擬似的に体験していただき、その意味や価値を実感もしくは予感していただくことを目指すものでした。それは昨年に開催した第一回FDフォーラムのテーマとして取り上げた“Facultyづくり”につながるものでした。

今後も同様の企画を開催していく予定です。皆様の積極的なご参加と、このような企画に対する要望やアイデアなどを寄せいただくことをお願い申し上げます。

（教育推進部教授 三浦真琴）



mind mapづくり

「関西地区FD連絡協議会」で ポスターセッションを行いました。

4月24日に京都大学で行われた「関西地区FD連絡協議会第3回総会」において、LA(ラーニング・アシスタント)が中心となりポスターセッションを行いました。

発表テーマは、昨年度「大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム」に採択された「三者協働型アクティヴ・ラーニングの展開－学生の「考動力」育成をめざして－」

の取組についてでした。約1ヶ月の準備期間を要しLAが完成させた手作りポスターを用い、参加者へ取組内容について説明しました。

実際にLAとして活動している学生が説明員となることで、授業現場でLAがどのように活躍しているかについて生の声を伝えられました。参加者からは「LAが授業に入ることでどのような効果が挙がっているのか」「LAの研修・育成体制はどのように



LA作成のポスター

Learning Assistant

LA活動報告



説明員として参加したLAと教職員

なっているのか」等の様々な質問が挙がり、本取組やLAへの関心の高さがうかがえました。

また、参加者からは貴重なご意見も多数頂戴し、今後本取組を発展させていく上でのヒントを得ることが出来ました。そしてLAにとっては、取組の説明や質問への回答を自分自身が行ったことで、これまでに修得したスキルや経験の棚卸しをする機会となりました。

今後も本学のLAに関する取り組みを学内外へ積極的に発信していきたいと考えております。
(CTL事務局)

教育開発支援センター 活用案内 CTL

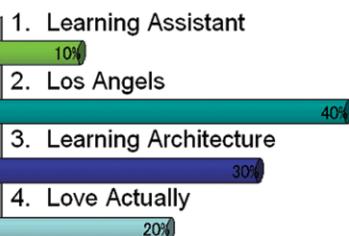
と、授業に役立つ様々な書籍やツールをご用意してお待ちしております。特にクリッカーは、既に複数の先生方からご興味を頂いております。これは担任者と受講生の双方向コミュニケーションツールで、学生のレスポンスをリアルタイムでパワーポイントのスライドに表示することができます。デモンストレーションや操作説明等も隨時実施しておりますので、ご興味のある先生方はぜひ一度お越しください。

お気軽に
お立ち寄り
頂ける空間



クリッカー端末
(KEEPAD JAPAN社製「Turning Point」)

問・「LA」は何の略語か？



回答結果がリアルタイムにスライドへ表示

書籍紹介（いずれも貸出可能です）

●高等教育事情を考察する

- 『変貌する日本の大学教授職』有本章(編著)(玉川大学出版部)
- 『大学教育を科学する－学生の教育評価の国際比較』
- 山田礼子(編著)(東信堂)
- 『教育の自治・分権と学校法制』結城忠(著)(東信堂)
- 『大学は生まれ変われるか』喜多村和之(著)(中央公論新社)
- 『世界の大学危機』潮木守一(著)(中央公論新社)
- 『大学教授職とFD』有本章(著)(東信堂)

『大学の起源』

Haskins,Charles Homer(著)青木靖三 他(訳)(八坂書房)

●インストラクショナル・デザインを知る

『インストラクショナルデザインの原理』

R.M.ガニエ 他(著)鈴木克明 他(監訳)(北大路書房)

●授業デザインを考察する

『先生のためのアイディアブック－協同学習の基本原則とテクニック』

Jacobs,George M. 他(著)関田一彦(監訳)(ナカニシヤ出版)

『授業デザインの最前線』高垣マユミ(著)(北大路書房)

教員紹介



山本 敏幸 教授

研究分野(領域) : 教育工学・e- ラーニング
(インストラクショナル・デザイン、学習理論、アセスメント)
所属学会／CIEC・情報処理学会・
日本工学教育協会

2002年3月までアメリカの高等教育に20年ほどかかってきました。その間に身に付けた教育哲学、e-Learningの考え方を教育に実践しています。古い慣習や型にはまらないように、コンストラクティビズムの学習理論を基礎として、学習者中心の授業・指導を目指しています。

e-Learningの学習環境、コンテンツ開発環境に携わっているので、新しいIT技術をいかにして教育の場に活用していくかが研究の主体です。例えば、e-Learningにおける学習効果の高いインタラクティビティの研究やe-ポートフォリオを如何に生涯学習の支援に活用していくかといった研究を行っています。

また、学習者の視点から学習者タイプ、学習者のレベルやニーズに応じてコンテンツレベルやインタラクティビティの度合いを可変できるような e-Learning システムの研究・開発に努めていきたいと思っております。自分自身のための生涯学習の基盤となるバーチャル学習空間も創造制作中です。

略歴

1992年 Rose-Hulman Inst. of Tech., Indiana, USA, Assistant Professor.
2002年 Indiana State University 大学院教育学部 Media Technology 専攻
Ph.D. 取得
2003年 金沢工業大学 教授
2010年 関西大学 教授

主な著書・論文

"THE DIFFERENCE OF INFORMATION TECHNOLOGY VISIONS BETWEEN THE FACULTY AND STUDENTS IN THE ENGINEERING LAPTOP INSTITUTION"
「KITにおける教員のICT活用による教育力向上の取組(FD)状況 工科系ラップトップ大学の視点から見たe-ラーニング構想の中のFD」、National Institute of Multimedia Education 単著 東京 2008.03 pp. 55~62
"Interactivity in Learning Enhanced by Virtual Tutors in E-Learning contents" 単著 ED-MEDIA 2008, Vienna, Austria, 2009.06
"e-Portfolio: Comparison of WebCT and Desire2Learn" 共著 Desire2Learn Workshop 2009. Minneapolis, WI, USA. 2009.07 (中沢実と共著)
"A Proposal for Measuring Interactivity that Brings Learning Effectiveness", 単著 Technology Enhanced Learning Conference, TELearn 2009. Taipei, Taiwan. 2009.10, Also published: Knowledge Management & E-Learning: An International Journal, Vol.2, No.1. 2010.3 ISSN 2073-7904

■スタッフ 教育推進部／三浦真琴 教授 (研究分野: 教育社会学、高等教育論) 須長一幸 助教 (研究分野: 哲学、高等教育論)

研究員 (授業支援グループアドバイザリースタッフ) /

遠海友紀 (総合情報学研究科博士課程後期) 齊尾恭子 (文学研究科博士課程前期修了) 今岡義明 (総合情報学研究科博士課程前期修了)



岩崎 千晶 助教

研究分野(領域) : 教育工学・
学習環境デザイン
所属学会／日本教育工学会・
日本教育メディア学会・大学教育学会

私は、ICT (Information and Communication Technology) を活用した学習環境デザインを専門としています。これまでに複数の学部の先生方と共に、CEASを活用した多人数講義における学習者同士のやり取りを促す授業やTAを活用した授業などを考へ、新たな授業実践のお手伝いさせていただきました。先生方と意見交換しながら学習環境をデザインするプロセスはとても楽しく、学ばせていただくことも多く、日々感謝しております。これから多くの先生方と話をして、学習環境デザインについて考へていきたいと思っております。ぜひ先生の話を聞かせてください! 連絡お待ちしております!

(ciwasaki@kansai-u.ac.jp)

略歴

2000年 富士ゼロックス株式会社 入社
2009年 京都外国语大学国際言語平和研究所 研究員
2010年 関西大学総合情報学研究科 博士課程後期課程修了 博士(情報学)
2010年 関西大学 助教

主な著書・論文

『映像メディアのつくり方—情報発信者のための制作ワークブックー』, 北大路書房, 2008.01 (久保田賢一, 中橋雄と共に著)
『LMSの活用事例から見る授業改善の試みと組織支援』, 日本教育メディア学会『教育メディア研究』, 第14巻2号, 2008.03, pp. 1~10 (久保田賢一, 冬木正彦と共に著)
"Analysis of Problems and needs for Instruction Reform In Higher Education", International Journal of Educational Media and Technology" Vol. 2, 2008.08, pp.55~64, M.Kishi, Y. Imaoka, T.Konno and T. Mizukoshi
『組織的な教員支援としてのスチューデント・アシスタントの効果と課題』, 日本教育工学会『日本教育工学会論文誌』, 第32号増刊号, 2009.02, pp.77~80 (久保田賢一, 水越敏行と共に著)

From
センター長

「マタイ受難曲」で思うこと

最近、親しい友からJ. S. Bachの「マタイ受難曲」を薦められ、初めて全曲を聴く機会を得ました。クラシック音楽を足掛け四十数年に亘って聴いてきましたが、この歳になるまで全曲に触れる機会に恵まれなかったようです。ご存知のよう

に、新約聖書の「マタイの福音書」をテキストにした宗教音楽です。この中に、イエスが12人の使徒に質問し、その答えについて、さらに話かける場面が度々出てきます。この曲を聴き進んでいくにつれて、師弟が真摯な態度で対話するという

ことが、教育の原点であるということを強く感じることができました。春とともに新入生を迎える新しい学びの時期に、学び(教育)について考えるきっかけとなつた「マタイ受難曲」とそれを薦めてくれた友に感謝したいと思っています。

教育開発支援センター長
化学生命工学部教授 池田 勝彦